

空を飛んだお婆さんの話



小豆（あずき）さんが「飛ぶ練習」を始めたのは、彼女が今年七十五歳で後期高齢者の仲間入りをしたからだ
と誰もが思っているが、夏至の日の朝食の時に、小豆さん
のパンを誰かが食べてしまったことも、原因の一つになっ
ていると僕は思っている。

小豆さんが入居している駅前の小さな老人ホームでは、
各階毎の入居者が集まって一緒に食事をするのだが、小
豆さんがテーブルについた時、何時ものパン皿に乗って
いるはずのパンがなくなっていたのである。

その時は、事務長が素早く代わりのパンを用意して、何事もなく収まったかに
見えたが、小柄で个性的で、奇想天外な発想でホームの老人達を時に驚かせる彼
女は、その日の夕方、「今日は何の日か知ってる」と、小さな声で僕にささやいた。

「おや、知らなかったの、今日が夏至だってこと」

それから、彼女は僕の耳元で、まるで魔女のようなことを言った。

「夏至の日には地下の魔物が地上に現れて、手下の悪魔や精霊たちといろいろ悪
いことをするって言われてるの。でね、その日に起こった悪いことは、その人に
一生付きまとうの。だから私は死ぬまで、私のパンを食べられ続けるんだわ」

「そんな迷信を信じているんですか」

「迷信じゃないのよ。私の若い頃はみんなその話を信じていて、夏至の日はいい
ことに会いますようになって、神様にお祈りしたものよ。でも悪いことが起こっ
てしまったら、それが繰り返し起こらないように、努力しないといけないの」

努力……？、突然、聞きなれない言葉に驚いた僕は、「努力って、何をするん
ですか」と聞いた。すると、小豆さんは真面目な顔で不思議なことを言った。

「空を飛ぶのよ、鳥のように自由に大空を飛びまわるの」

それは小豆さんがまだ11歳、終戦の年の大阪大空襲の日のことである。

その夜、当時大阪西区の立売堀に住んでいた小豆さんの一家は、沢山の人々と
一緒に火炎の下を逃げ惑っていた。小豆さんは、家々が燃え上がる炎に呑み込ま
れていくのを見た。身体ごと炎に包まれる年寄りや子どもを見た。

「私たちは何とか御堂筋までたどり着いた。御堂筋は道が広がったから大勢の人
が避難していた。すると心斎橋の地下鉄の入り口が開いていて、誰かが『ここへ
入れ！』って叫んでいた。それで私たちは周りの人と固まってホームに降りて行
ったら、不思議なことにそこに電車がやってきて、ホームに止まると扉が開いて、
そう、地下鉄が走っている。そんな真夜中の時間は動いていないはずなのに、で
もその時は誰も不思議に思わなかった、その電車で私たちは救われたのよ」

小豆さんたちは、地下鉄に乗って終点の梅田で降りた。外に出てみると、大阪

の南の方は赤々と炎に包まれていたが、梅田の町は焼けてはいなかった。明け方の静かな空気さえ感じられるその町で、小豆さんは、空の彼方に飛んでいくB29の残影をはっきりと見たんだそうだ。

「ええ、あの大きな翼のB29よ。それが何機も連なって飛んで行くの。彼らは自由に空を占領して、地上の私達に爆弾の雨を降らして、町を焼いて、沢山の大人や子ども達を殺して、だから私は思った。今度やってきたら私が空を飛んでB29と戦ってやるって、その時よ、私は空を飛びたいって思ったのは」

けれど、その次の日に天王寺から関西線の汽車に乗って、お母さんの故郷の奈良の斑鳩に疎開した小豆さんたち一家はそこで終戦を迎え、もうB29のやっつこなくなった空に、彼女が飛ぶことはなかった。

「でもね、私はその時からいつか空を飛びたいと思っていたの」

そして後期高齢者に達した彼女は、突然、若い日の決意を思い出したのである。それは若い頃に「夢見た」ことを実現するには、恐らく最後の年齢だから…。

近くの神社の夏祭りが終わって、ホームの老人たちが暑い暑い夏を迎えた頃、小豆さんは近くの図書館に通って、飛ぶための方法を調べ始めた。イカルスの翼のことや中国の鳥人、アラビアの空飛ぶ木馬やレオナルド・ダ・ビンチの飛ぶ機械、それからドラエモンのタケコプターやとなりのトトロも調べてみたが、どれも小豆さんには難しすぎて役には立たなかった。

結局、小豆さんが気にいったのは、僕が見つけてきた「人は誰でも鳥になれる」というかなり眉唾もののハウツー本だったが、それには飛ぶための方法が分かりやすく、具体的かつ実践的に書かれていたのである。例えばこんな風に……、

『鳩語と、雀語を勉強すること。朝起きると蛙飛びで家の回りを5周すること、蝗とバツタの佃煮を毎食食べること、ビールのアテは焼き鳥に限ること……』

ホームで不思議な幽霊の噂が立ち始めたのは、花火大会も終わって、蝉の声が一段と暑く聞こえるようになった頃だ。

それはホームの屋上に通じる階段を、黒い服を着て大きな帽子を被ったお婆さんが上がっていったという噂もあったし、その不思議な人物が夜中に廊下を走っていたという噂もあったが、そのうちに、それは小豆さんに違いないということになった。何故ならある朝の食事の時に、

「あ、それ、私よ、今、魔女になる練習をしてるの」と、彼女が言ったからだ。

「魔女……？って、もしかしたら、あの空を飛ぶお婆さん……？」

「そう、私、最近気が付いたんだけど、魔女は誰でもなれるんじゃないかと思うの。そりゃあ、先祖伝来の魔女の家系の人よりはなり易いとか、文化系より理科系のほうがなり易いとか、中島みゆきのファンの人よりはなり易いといったことはあるけど、要するに私のようなお婆さんが一番なり易いんじゃないかと思うの」

僕は小豆さんの説明をきいていて、それはたぶん、例の本に書いてあったに違いないと思った。間違いなくお婆さんの彼女は、どちらかと言えばお婆さんが多

い魔女になって、空を飛ばうとしているのだ。

「だから、私、決心したの。魔女になろうって ！」

その日から、小豆さんの魔女修行は、ホームの中では公然のことになった。老人達はもちろんのこと、僕達も小豆さんの顔を見ると

「今日は、空飛ぶ箒の調子はどうですか」とか「赤いリンゴを金のりんごに変える魔法は完成しましたか」とか、言ったりした。

しかし或る朝の朝礼の後、事務長が僕に言った。

「あまり進むようだと、別の施設に移って貰うから、ちゃんと観察してくれよ」

確かに小豆さんはもう僕達の世界から少しずつ別の世界に行こうとしていた。年齢とともに忍び寄る遠い世界に 。

それはホームの老人達が、大文字の送り火を見た次の日の朝のことだった。ホームの屋上からは、高円山の大的字が、夜空に少し歪んでみえるのだ。

小豆さんが起きてこないことに気付いた僕は、すぐに合鍵で部屋に入ったが、小豆さんの部屋は綺麗に片付いていて、そこに彼女の姿はなかった。すぐにホームの職員で小豆さんを探したが、彼女はどこにも発見されなかった。

「小豆さんは、お盆が終わったら魔女になれるって言っていたよ」

と、いつも小豆さんの向かいの席で食事をする老人が言った。

すると小豆さんの隣の部屋の住人が、西の空を指差しながら言った。

「そういえば、今朝、ベランダから箒にまたがって黒い三角形の帽子を被った小豆さんが、空の向こうに飛んで行ったわ」

僕はあわてて、窓を開けてみたが、ホームの西には生駒の山並みが広がっているばかりで、飛んでいるものなど見えるはずはなかった。

でも僕はその時、もしかしたらと思った。もしかしたら小豆さんは本当に飛んで行ったのかもしれない。魔女になって魔法の箒にまたがってあの山の向こうに飛んで行ったのかもしれない。もう僕達の世界に住めなくなった小豆さんは、まだ少女だったあの時の空に帰っていったのかもしれない。それが証拠に、ホームの庭を掃く箒が一本なくなっている。

一時間後、僕は大阪の立売堀に居た。そこは小豆さんが生まれて、終戦の年、B29に家を焼かれるまでを過ごしたところだ。

四ツ橋の交番で聞いたその住所は、今はビルの谷間の小さな公園になっていた。その公園の大きな木の下ベンチで、僕は小豆さんを見つけた。小豆さんは僕が来るのを待っていたように立ち上がり

「ここよ、このベンチのところに私の家があったのよ」

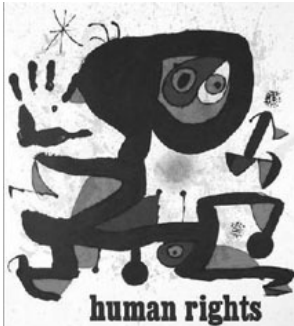
公園の前には大きなマンションが建っていた。僕は小豆さんの横に座りながら、此処まで箒に乗って飛んできたんですかと、聞いた。

「馬鹿ね、年をとったからって魔女になんかなれないわよ。人間は幾つになっても人間のまま、悲しいけれど空を飛ぶわけにはいかないわ」

と、小豆さんはビルの上に広がる夏空を眺めて言った。

(了)

かぐや姫に恋をしたお爺さんの話



中村ちゃんが『ミスかぐや姫コンテスト』に出場したのは、その年の春のことだった。

彼女の住んでいる県中部の町には竹取物語の伝説があって、町で只一つの回転寿司屋の屋根では、天平時代ふうのかぐや姫が、月に向かって飛ぼうとしていたし、かぐや姫ホールと名づけられた公民館では、王朝時代ふうのかぐや姫が、疲れた表情で憂いに沈んでいた。かぐや姫コンテストは町の観光PRを兼ね、毎年春に桜祭りに合わせて開催されたのである。

中村ちゃんは僕が勤めている駅前老人ホームのヘルパー仲間で、誰にでも優しくて気立ての良い彼女は老人達に特別人気があった。

中村ちゃんの体操の日は沢山の老人が三階の食堂に集まり、「はい、姐ちゃんの通りにやって下さいね」という彼女の掛け声で、普段身体を動かすことの嫌いな老人たちも、生き生きと手や足を動かすのだった。中でも、若い頃は漁師だったという亀さんは、一番元気に体操をしていたのである。

かぐや姫コンテストの日、亀さんは自慢の大漁旗を持って何人かの老人たちと一緒に応援に出かけた。

その日の中村ちゃんはまるで卑弥呼のような格好でロックのリズムに合わせて舞台の上で舞っていたが、僕にはその舞いは彼女が体操の時にやる身体の動きにそっくりなように思えた。だから応援している老人達も同じように踊り出し、亀さんなんか勢いに乗って舞台に上がり中村ちゃんと一緒に踊り出したのである。

そして彼女は、準ミスかぐや姫に輝いた。

亀さんが怒りっぽくなったと、ヘルパー仲間の一人が僕に言ったのは、六月に入って雨の日が多くなった頃だ。確かに僕も一度夕食の時に味噌汁が冷めていると、亀さんに言われたことがあった。

「亀さん、最近おかしくないですか」

僕が、一人で食後のお茶を飲んでいる小豆さんに小声で言うと、小豆さんは、「あら、分からないの。亀さん、恋をしてるのよ」と、何でもないように言った。

「恋...？、亀さんがですか」

「そうよ、もうすぐ夏でしょう。昔の偉いお坊さんも言ってるじゃない。夏は恋の季節だって」

「亀さんが誰に恋をするんですか」

「中村ちゃんよ、だって亀さんはみんなに怒りっぽくなってんだけど、中村ちゃんだけはその中に入っていないじゃないの」

まさか！、と呟く僕に、じゃあこんな話を知っていると、ホームの老人たちが

らミス（？）生涯学習婆さんと呼ばれている小豆さんは言った。

昔、ある高貴な館の庭掃きの老人が、その館の女御に恋をしてしまった。このことを伝えられた女御は「池辺の桂木に掛けた鼓を打って、その音が私に聞こえたら逢ってあげましょう」と老人に伝える。老人は一筋に心をこめて鼓を打ってみるが一向に鳴らない。その鼓は革の代わりに綾絹を張った、打っても打っても鳴ることのない鼓だったのである。

「それで、どうなるんですか」

「さあ、それは亀さんを見ているのとわかるんじゃないの」

それは、亀さんの大好きな夏の高校野球の県大会が始まって駅前ホームの近くのK高校が出場した時のことだ。大型テレビの前に集まった老人たちはもちろんK高校を応援したが、不思議なことに亀さんだけは対戦相手の高校を応援していた。その高校は中村ちゃんの町の高校で、大番狂わせでその学校がK高校を破った瞬間、悔しがる老人たちを尻目に亀さんだけは躍り上がって喜び、ホームの中を大漁旗を持って駆け回ったのだ。

その日から「亀さんの恋」はホームの中では公然のことになった。もちろん老人たちは、それは孫を可愛がるようなものだろうと誰もが思ったが、冗談半分に、でもいくらか羨望を込めて

「亀さん、中村ちゃんに愛の告白はしたの」と、中村ちゃんの居る時に、照れ屋の亀さんをからかったりした。すると、気のいい彼女は、

「まだなんですよ。私は本当に待ってるんですけどね」

と、いたずらっぽく笑いながら応えたりした。

「亀さん、かぐや姫に恋をした時は何を贈り物にしたらいいか知ってる？」

ある日、一人で食堂のテーブルに座っていた亀さんに小豆さんが言った。

「それ、竹取物語に出てきましたね。『崑崙の遥か山奥にあるという蓬莱の玉の枝』とか、『南海に住む龍の首の珠』というような世にも珍しい宝でしょう」

亀さんの代わりに横で聞いていた僕が答えると、

「そう、でもそんなものは誰も手に入れることは出来なかったし、かぐや姫は本当はそんな宝物を欲しいなんて思っていなかったのよ。かぐや姫は、この鼓の音を聞かせて欲しいと言ったのよ」

そして小豆さんは一つの鼓を取り出すと亀さんに渡した。僕はすぐに気がついた。それは音の鳴る皮のかわりに、綾絹が張られた「綾の鼓」に違いない。

「この鼓の音が中村ちゃんに聞こえたら、その時は、きっと亀さんの思いが本物の恋だって中村ちゃんは気が付くわ」

魔女のような薄笑いを浮かべて、小豆さんは亀さんの耳に囁いた。

亀さんがあまり自分の部屋から出てこなくなった時、

「やっぱり亀さんも年だねえ、夏の疲れが出たんだよ」

と言って、老人たちは気にしなかった。事実、お盆が過ぎた頃は彼らはあまり部屋から出たがらなくなり、中村ちゃんの体操の日も老人たちの姿は半分ぐらい

に減っていた。

しかし僕やヘルパーの仲間たちは、亀さんが部屋に閉じ籠った理由を知っていた。亀さんはいつも部屋の奥でガラス戸の外に向かって椅子に座り、鳴らない鼓を打っていた。亀さんが鼓を始めた理由が自分にあることを知らされた中村ちゃんは、最初少し青い顔をして事務長に相談したが

「いいじゃないか、放つときなさいよ。そんな鳴らない鼓なんか打ち続けられるもんか。すぐに飽きてやめてしまうよ」

と言われて何も言わなかった。しかし彼女は老人たちが囃してももうあまり軽口は言わなくなった。でも、食事の時なんかは以前と同じように、

「はい、亀さんは私の大事な人だから沢山食べて下さいね」

と言ったりして。周りの老人たちを羨ましがらせたりした。

しかし、暑い夏も盛りが過ぎてホームの老人たちに元気が戻ってきても、亀さんは部屋に籠ったきりで、食事と散歩の時以外はあまり姿を現さなかった。僕達は亀さんの「本気」を感じ始めていた。でも僕はもしかしたら亀さんは鳴らない鼓を打ちながら、懐かしい時間をさ迷っているのかもしれないと思った。亀さんの部屋には、亡くなった奥さんや、兄弟や両親や、子ども頃に出会った人々が、僕たちには聞こえない亀さんの鼓の音を、聞きに来ているいるのかもしれない。それほどに鼓に向かってる時の亀さんは、清しい顔をしていた。

駅前商店街に秋風が吹き、アーケードの天井の飾りが海水浴からお月見の絵に替わった頃、中村ちゃんが結婚するために、ホームを退職するということが知らされた。僕達はなるべく老人たちの耳に入らないようにしていたが、自然と噂は流れ、いつか亀さんの耳にも届いている筈だったが、亀さんは何も言わなかった。

最後の出勤の日、中村ちゃんがお別れを言うために亀さんの部屋に行くと、亀さんはやっぱり窓辺に座って鳴らない鼓を打っていた。

「さよなら、亀さん」と中村ちゃんが声をかけると、亀さんは哀しそうに、小さな声でこう言ったんだ。

「もう一日、いやもう一夜あれば鼓の音を聞かせることが出来たのに……」

その夜のことである。夜中の一時頃、僕はホームの三階で不思議な音が聞こえてくるのに気がついた。その音は亀さんの部屋から聞こえてきた。

それは秋の夜の冷気に弾むような乾いた音で、まるで子どもの遊びのようにぼんぼんと響いてきた。間違いなく、鼓の鳴る音だった。

驚いて扉を空けて中に入った僕の目に、窓辺の椅子に座って鼓を打つ亀さんの黒い影が浮かび上がった。そして大きなベランダの窓の向こうには、その夜満月を迎えた月が明るく輝き、月から迎えに来た沢山の天人たちに守られて、高く高く上っていく中村ちゃんの姿が見えた。

(了)



「何か寂しそうですね」

車椅子で自分の部屋に帰る鈴木さんの後ろ姿を見ていた看護師の福德さんが、小豆さんに言った。

「秋だからね」

小豆さんは駅前老人ホームの大きな窓の外に広がる空を見ながら、食後のお茶を飲んでいた。

「でも、あの人は子供さんを失くしたって言ってたわ。女の子。来年は小学校だったって」

福德さんは笑い出した。鈴木さんにそんな小さな子供があったら、超高齢出産の世界記録になってしまう。

「そうだね、じゃあ子供を失くしたっていうのは貴方だった？ 確か貴方の子供も、来年は小学校だって言ってなかった？」

「ええ、私の子供も来年は小学校ですけど、元気に今日も保育園に行きましたよ」

「居なくなったのは貴方の旦那だった？ ほら、向かいの奥さんと駆け落ちして」

「いいえ、向かいの奥さんと私は友達ですから、大丈夫ですよ」

「その友達が危ないのよ。ほら、昨日もテレビでやっていたわ」

福德さんは、手に持っていた入居者の健康診断カードの小豆さんの欄に、「腹が立つほど元気」と書いてやった。それから少し小豆さんを睨んで

「小豆さんはどうしても私を不幸にしたいんですね。でも私は幸運の名前を持ってます。だから小豆さんが期待するようなことは、私には起こらないんです」

その時、二人の居るホールに続く廊下の陰から一人の老婆が静かに現れ、福德さんの前に佇むと、声をかけた。

「娘さん、あなたは何と言うお名前？」

福德さんは驚いた。娘さんと言われたからではない。その媪（おうな）のような老婆がこのホームでは見かけない顔だったからである。福德さんは老婆の澄んだ目に吸い寄せられるように立ち上がると、

「はい、私は……千子です。福德千子です」と、言った。

「そう、千子さん、いいお名前ね。あなたはきっと長生きしますよ」

老婆が立ち去った廊下の陰を福德さんはボンヤリと見ていた。福德さんの名前は「千子」ではなかった。小豆さんが福德さんの心の中を探るように

「それはあなたの大切な人の名前でしょう」と、言った。それから「こんな歌を知ってる」と言いながら、晴れやかな声で一つの万葉歌を朗読した。

『足柄の み坂畏み 曇り夜の 我が下ばへを こちでつるかも』

昔、古典の先生をしていた小豆さんは、今も町の万葉研究会で活動している。

「どういう意味なんですか？」

「これは東歌なの。足柄山って知ってるでしょう」

「知ってます。富士山の近くの山でしょう」

「そう、『み坂』というのは峠のことで、高い山の境の峠には恐ろしい神さまが居られるから、秘めていた思いを声に出して言ってしまった、という意味なの」

「何を言ってしまったんでしょう」

「名前、それも大事な人の名前、ほら、今貴方が思わず言ってしまったように。昔の人はね、名前にはその人の魂が宿ると考えていた。だからその人の名前を口に出して言うことは、その人を大切に思っていますということね」

大切なもの、大切な人の名前、確かにその名前は福德さんにはとても大切な名前に違いない。彼女は突然お婆さんに名前を聞かれて、思わずその名前を言ってしまった。その名前は、例えば今日のように澄んだ青空を眺めて居る時に突然頭の中に浮んできたりした。福德さんはお婆さんの澄んだ目に青空をみたのかもしれないと思った。するとあの人は神様なのだろうか。

「そうよ、ここに居る人たちはみんな長いこと生きてきたんだもの、なかには神様が居たって不思議ではないでしょう」

鈴木さんが、自分の子供を捜し始めた。彼女はまるで街角に佇んでいる一人の母親のように、ホームの廊下やホールに佇んで、

「私の子供を知りませんか」と老人達に尋ねた。すると心優しい老人たちは、

「貴方の子供は町外れの公園で一人で遊んでいましたよ」とか、

「夕方になったら、きっとあなたの子供は帰ってきますよ」とか言ったりした。

駅前老人ホームの住人たちは、それぞれの人生に段差があっても、適当に埋めて暖めていく智恵を、長い人生の中で育てていたのである。

それは十月の最後のハローウィンの日の出来事だった。

この日一階のホールに老人達が集まり、思い思いの衣装で仮装したホームの職員や、ヘルパーの歌やかくし芸を見物した。一番の人気はかぐや姫の衣装で踊りを披露した中村ちゃんだったが、魔法使いの衣装で歌を歌った福德さんも盛んな拍手を浴びた。その拍手が終わらないうちに鈴木さんが車椅子で舞台に現れた時は、観客はてっきり予定された即興劇の始まりだと思っていた。確かにそこで交わされた鈴木さんと福德さんの会話は、まるで説話劇のようだった。

「魔法使いのお婆さん、私の子供を知りませんか？」と、鈴木さんが言った。

「あなたの子供さんが居なくなったのは、いつの事なんですか？」

「ずっと昔の秋の日のことです。私たちは海に見える丘の上に住んでいました。或る日子供はうさぎ貝を捜しに海に出掛けて、そのまま帰ってこないのです。

私は長い時間子供を捜していました。そして何年も経った時もう疲れて、諦めてしまって、それからは何事もなかったように生きてきました。でも、本当は子供を連れた母親を見ると妬ましくなりました。お前の子供も居なくなればいいのにとあって、生きてきました」

その言葉を聞いた福德さんは、少し青い顔をして俯いていたが、決心したよう

に顔を上げて言った。

「あなたの子供さんを知っている人が、このホームの中に居ると思いますよ」

「それはどなたでしょう？」

「それは、母親を失くした子供です。その子は小さい時に海で母親を失くしたのです。その子は母親に手を繋がれた子供を見ると妬ましく思って生きてきたのです。お前の母親も居なくなれば良いと思って、生きてきたのです」

「……それは貴方ですか。私の子供を知っているというのは、貴方ですか？」

福德さんはそれには答えず、震える声で鈴木さんに聞いた。

「あなたの子供の名前は何というのですか？」

「千子です。私の子供の名前は千子です。鶴は千年の千子です」

次の日曜日、福德さんは和歌山の海南に来ていた。そこは奈良から二時間ほどで行ける海辺の町だった。鈴木さんが奈良の息子さんの家に来る前は、この町で一人で住んでいたことを、いつもホームへ鈴木さんに会いに来る息子さんに教えて貰ったのである。

鈴木さんが住んでいた家は、駅から二十分ほどの藤白神社の傍にあった。彼女の家は改築されて表札も新しくなっていたが、名前はやっぱり「鈴木」だった。

鈴木さんが遠い昔にこの町で本当に自分の子供を失くしたことを、年老いた藤白神社の宮司は覚えていた。それは六十年ほど前のことで、海南の海にはまだ白い煙を出し続ける工場も、青空に赤い車で回り続ける観覧車もなかった。その女の子は、神社の境内に今もある大きな楠の周りでよく遊んでいたそうである。

その子が五歳の時、海岸に大好きな貝を捜しに行ってもそれきり戻らなかった。村人達が何日も捜したが子供はついに見つからなかった。母親は、渡りの鶴が干潟の魚を求めて来る頃になっても、まだ諦められず冬の海を見つめていた。

福德さんは、この地で非業の最後を遂げた古代の皇子の廟所に参った後、熊野古道に向かった。藤白峠の地蔵峰寺を目指すこの道は藤白坂と呼ばれ、昔この道を歩いた都の貴族が「攀じ昇る」と表現した急坂である。

福德さんは坂の途中で出会う「丁石地蔵」に祈りながら、もう一人の「千子」のことを考えていた。それは福德さんの母親だった。福德さんは紀州半島の先端的那智勝浦で育った。彼女は福德さんが五歳の時、海にあわびを取りに行っても戻らなかったのである。

やがて福德さんは峠に登り付き、御所の芝と呼ばれる場所に着いた。ここからは入り江を挟んで、古代の人が遊んだという万葉の故地が望めた。今は埋め立てられた干潟の海には、冬になると沢山の鶴が北の国から訪れたに違いない。海を渡る風に吹かれながら、福德さんは大切な人の名前を口にしていった。

「千子です。私の名前は千子です。鶴は千年の千子です」 と。 (了)



徳さんが亡くなった時、すずさんが自分の右手の小指を切って、徳さんの棺の中へ納めたという話を、事務長から聞いたホームの老人たちは少し顔色を変えたが、それは本当のことかもしれないと思った。

事務長の話では、すずさんは、きれいな袱紗に包んだそれをそっと徳さんの遺体の脇に置いたあと「あなたが世界で一番美しいと言ってくれた私の小指ですよ」と、言ったんだそうだ。

徳さんの遺族は驚いてすずさんの包帯で巻かれた右手を見て、それから棺の中に置かれた袱紗の包みを見たが棺の中から取り出そうとはしなかった。その代わりにすずさんの言葉も袱紗も気付かなかったふりをして、あわてて棺の蓋をしてしまったんだそうだ。

徳さんの葬儀の後、すずさんはホームに帰ってこなかった。事務長は、認知症も冷え性も治ってしまったすずさんは、まるで娘に返ったように、秋色に染まった夕闇の街に消えてしまったと言ったが、すずさんがホームから退出したかどうかまでは言わなかった。たぶんそれまで老人ホームに入った認知症の年寄りが、また10歳も20歳も若返ってホームから出て行くことなど、ありえなかったからに違いない。

すずさんが徳さんと出会った老人ホームは、駅前の商店街の一角にある7階建てのマンションのような古い建物で、隣には老舗の和菓子屋があり、道幅4メートルの向かいには花屋とうどん屋とパチンコ屋が並び、商店街は買い物客と通勤客でいつも賑わっていた。此处を訪れる人たちは、最初はこの老人ホームには不似合いの環境にとまどったが、不思議なことにここに入った老人たちは皆元気になるのだった。たぶんそれは町のせいかもしれないが、それは、彼らに老人らしからぬ行動を起こさせることもあった。

すずさんが徳さんに声を掛けられたのは入居して三日目のことだった。一人で夕食の席に座っていたすずさんの前に、いきなり徳さんが座るとこう言った。「僕は明日入院します。目が悪いので目の手術をするのです。でも難しい手術だから失敗したら失明するかもしれません」

すずさんは、驚いて持っていた箸を落としてしまった。すると徳さんは何でもないように箸を拾いあげるとすずさんの手に握らせて、ついでにすずさんの手を握りしめると、

「だから、一生の最後に世界で一番美しいものを見ておきたいんです」

すずさんはその言葉を聞いて、からかわれていると思ったんだそうだ。すると徳さんは、少し怒ったようなすずさんの顔を見つめて

「僕が世界で一番美しいものと言ったのは、あなたの指です。それも右手の小指、

僕はあなたが来られてから、なんて美しい指の人だろうと思っていました。だから、つい変なことを言ってしまったんです」

次の日、本当に入院した徳さんは、その次の日失明することもなくホームに帰ってきた。入院の日、心配そうに見送ったすずさんに、

「あの人の目は白内障よ。本当は日帰りでもいいんだけど、徳さん暇だからね。無理に頼んで一泊にして貰ったのよ。えっ、失明、今時白内障で失明する人なんかいないでしょう」と、隣の部屋の住人が囁いた。

でもすずさんは帰ってきた徳さんを見て本当に嬉しそうだった。まるで戦地から帰って来た恋人を迎えるように……、確かにその時、すずさんは恋をしていたんだと思う。そう、熟年の恋を。

それから毎日、一緒にお茶を飲んだり、肩を寄せ合って散歩をしたり、一緒に商店街で買い物をする二人の姿が見られた。事件が起こったのは商店街が一年で一番活気付くクリスマスの日のことだ。

その日、ホームでは一階のロビーで年末恒例の余興大会が開かれた。ホームの老人たちが日頃クラブ活動で鍛えたカラオケや器楽演奏を披露するもので、地域交流という趣旨で誰でも見物していいことになっている。当然老人たちは闘志を掻き立てられて、この日を目指して練習を重ねてきたのである。

徳さんとすずさんは、カラオケでデュエット曲の「銀座の恋」を披露した。すずさんの若々しい歌声と、徳さんの重厚な低音は快く重なり合い、ぴったりと寄り添って歌う二人の姿は、幸せな恋人そのものだった。

異変が起きたのは、割れるような拍手の中で曲が終わったその時である。

突然、客席の最前列に居た男性が二人に近寄ると、徳さんを押しのけてすずさんに近づき、すずさんの手をつかむと、連れ去ろうとしたのだ。

すずさんは必死で男の手を振りほどくと、徳さんの後ろに隠れた。その時、老人達は、「こんな男と歌なんか歌って」とか、「恥ずかしくないのか」という、短い言葉が男の口から発せられたような気がしたが、それよりも両手を広げて男の前に立ちほだかった徳さんの凜とした姿に見ほれて、誰もが余興の続きだと思ったのか、歌が終わった時よりも、さらに大きな拍手が沸いたのである。

男は僕たちが近づくと、あきられたのか何も言わず玄関から立ち去った。

「あいつはすずさんの 昔の男 だよ。ほら、すずさんは何処となく垢抜けていて、普通の年寄りとは違うだろう。何でも若い頃花街の売れっ娘だったことがあったそうだよ」

騒ぎが無事に収まったのを見て安心した事務長が、訳知り顔で教えてくれたが、物静かなすずさんが花街に居たというのは、僕には信じられなかった。

その前の日まで元気だった徳さんが突然亡くなったのは、梅の花が綻びかけた春も近い日のことだった。珍しく朝食の席に出てこない徳さんのことを、すずさんが担当の僕に教えてくれた。僕が合鍵を使って部屋に入り、すでに冷たくなっていた徳さんを発見したのは他の老人たちが朝の連ドラを楽しんでいる時間だっ

たが、すずさんだけは僕と一緒に徳さんの最後の関係者になってくれた。

徳さんは持病の心臓病で、誰にも気付かれず一人静かに逝ったのである。

徳さんの葬儀が終わっても、ホームに帰ってこないすずさんの処置に困った事務長に言われて、すずさんの担当でもあった僕はすずさんに逢いに行くことになった。すずさんからの電話で、彼女が息子さんの家にいることは分かっていた。

その日、すずさんの家で息子さんに挨拶された僕は、息子さんがクリスマスの余興大会の日に見た 昔の男 だったことを知って驚いた。

「事務長がそう言ったの。私にまとり付いて厄介をかける 昔の男 。確かにそうじゃないの。この子、成績は悪いし、身体は弱いし、本当に厄介かけさせられたんだから、事務長のいうことは当たっているわ」

すずさんは、笑いながらそう言って、僕に右手を見せながら

「それと、これでしょう。貴方が驚いているのは 」

すずさんの右手には、ちゃんと小指が付いていたのである。しかも驚くほど若くて、それに美しい。でもそれは動いてはいなかった。

「そうよ、これは動かないのよ。作り物だから。ほら義手ってあるでしょう。私のは義指。もちろん生まれた時は本物の指があったわよ。どうして私が本物の小指を無くしたのか教えてあげましょうか」と言うと、すずさんはその訳を話してくれた。それはまるで水木しげるの怪奇まんがのような、不思議な話だった。

それはまだ戦争前ですずさんが花街の売れっ娘だった頃、すずさんには好きな人が居たんだそうだ。ところがその人が戦争で出征することになった。

「私は神様にお祈りをしたの。この人を無事に帰して下さい。もし無事に帰って来れたら、私の小指を神様に差し上げますって」

「どうして、小指なんですか？」

「武士道ね。日本の武士道、それに私は花街に居たでしょう。だからよ」

その世にも不思議なことは、それから一年ほど経った或る日の夜に起きた。

「私は眠っている時に物凄い腕の痛みで目を覚ましたの。そしてすぐに右手の小指が無くなっていることに気がついた。それから私はあの方が戦地で死にかかっていること、でもその人の命は助かって無事に帰って来るということも 」

やがて戦争が終わってすずさんは本当にその人が戦地で負傷して死にかけていたことを聞いた。すずさんはその人と無事に結婚した。その人は結婚指輪の代わりに、世界一の名人に頼んで彼女の義指を作ってくれたんだそうだ。

「じゃあ、徳さんが世界一美しいと言ったのは当たり前だったんですね。その指は年を取らないんでしょう」と、その不思議な話の後で僕が言う

「それは違うわね。だってあの時私は義指をつけていなかったのよ。徳さんは目が悪かったでしょう。だからあの人はある筈の無い指を美しいと言ったのよ」

と、涼しい顔ですずさんは答えた。

(終わり)